

II - A - 6

肺癌末期痛に対する NALP の有用性について

て

関西電力病院・麻酔科

○土井紀弘, 河本 健

呼吸器科

秋山治彦, 岡田賢二, 前里和夫, 人見滋樹

NALP (Neuroadenolysis of Pituitary Gland) は癌末期の強い痛みに対して有効な除痛方法であって、既に相当数の臨床例についての報告がみられ、その有効率は著効、有効を含めて 65 ~ 70 % であるとの報告がある。この手技の利点として、1) 手技が簡単で何度でも繰返し行える。2) 骨転移などに伴う広範な疼痛に対して有効な治療結果が期待出来る。3) 神経ブロックに際し時折みられるような運動機能の障害がみられず、自動能が保たれる。4) 合併症が比較的少ない。などのすぐれた特徴をもつことである。一般に疼痛寛解の指標を何にもとめ、どのように客観化するかは困難なことであるが、慢性疼痛にさらされている患者は有意に過換気状態にあるとされ - PaCO₂ 30.9 torr (range 18.1 ~ 39.9 torr) - , Visual Analogue Scale をもちいて、NALP の効果を著効、有効、無効の各グループについて比較検討を行った。胸部外科領域での痛末期の除痛対策としての NALP の有用性とその除痛機構について文献的考察を加えながら報告する。

II - A - 7

肺癌に合併した在郷軍人病の 9 症例

長崎大・第二内科

○原 耕平、田中 光、重野芳輝、藤田紀代、朝長昭光、植田保子、神田哲郎、鈴山洋司、

山口恵三、斎藤 厚、

佐世保総合病院・内科

石崎 駿、籠手田恒敏

長崎成人病センター

堤 恒雄

長崎市立病院・内科

中野正心

肺癌患者の直接死亡の原因として肺感染症の占める頻度は高い。在郷軍人病は近年 opportunistic infection としてみられることが多く、各種基礎疾患の経過中に発症することが知られている。

今回、私達は入院患者で重症肺炎で死亡した症例について、剖検肺組織および保存血清を用いて、在郷軍人病の診断を行なった。

成績：各種基礎疾患を有する患者で、病理学的にも臨床的にも、細菌性肺炎が直接死因と思われた 196 症例から、直接蛍光抗体法で本症と診断された症例は 42 症例であった。このうち、肺癌は 8 症例（原発性 7 例、転移性 1 例）であり、血清学的に診断されたものは 1 症例であった。この 9 症例は原発性肺癌 8 例（扁平上皮癌 4 例、未分化癌 3 例、腺癌 1 例）で、組織型からみると腺癌が少なかった。

平均年齢は 68.2 才、男 8、女 1 の割合で、ほとんどの例が抗癌剤、ステロイドホルモンの使用および放射線療法が行なわれていた。

臨床像は基礎疾患による症状、徴候、検査所見に加えて、強い炎症所見がみられ、最高体温は平均 39.0 °C、CRP は全例強陽性であった。基礎疾患による臨床像と肺炎発症症状との鑑別は困難で、診断が遅れ、発症から死亡時までの経過は 7 日以内のものが多かった。

胸部レ線は種々の型の肺炎像をとり、本症に特徴的なものは見出し得なかった。比較的徐脈を呈した症例はなかった。

本症発症後の治療抗生剤の種類は Cephalosporins (Cephamecins) や Penicillins などの本症に無効の β -lactam 系抗生剤が使用されているものが多かった。

以上、肺癌に併発した致死的在郷軍人病の臨床像、頻度について報告したい。